

目次

前言	i
本書について	vii

第一部 序論

第一篇 史料の収集と整理	3
一. 伝世の鍼灸古典籍の数量と価値	3
二. 亡佚文献	5
三. 出土文献	8
四. 古今の医籍整理の失敗例	10
(一) 宋代校正医書局による改竄の弊害	10
1. 新たな配列 2. 原文の添削 3. 増補 4. 誤改と誤注	
(二) 現代の医学古典籍整理でよく見られる問題	17
1. 1950～60年代 2. 1980～90年代	
第二篇 史料の鑑別	25
一. 版本の鑑定および版本の起源と沿革の考察	25
二. 鍼灸の偽書・偽版の鑑別	28
(一) 鍼灸の偽書	28
1. 『勉学堂鍼灸集成』 4巻 2. 『鍼灸秘奥』 4巻 3. 『経学会宗』 抄本残巻 4. 『銅人鍼灸経』 7巻, 『黄帝明堂灸経』 3巻 5. 『癰疽神秘灸経』 1巻 6. 『神応経』 1巻 7. 『瓊瑤神書』 4巻	
(二) 鍼灸の偽版	31
1. 『鍼灸大成』 10巻 2. 『鍼灸六賦』 抄本 3. 『鍼灸甲乙経』 12巻 4. 『銅人腧穴鍼灸図経』 3巻本 5. 『西方子明堂灸経』 7巻 6. 『鍼灸聚英』 4巻 7. 『鍼灸易学』 2巻	
三. 鍼灸史料の起源の追究	34
四. 鍼灸古典籍の基本構成	39
(一) 『鍼灸甲乙経』	39
(二) 『鍼灸資生経』	40
(三) 金刻5巻本『銅人腧穴鍼灸図経』	40
第三篇 史料の理解	42
第四篇 鍼灸文献の基本的特徴	49
一. 一般的特徴	49
(一) 文献の蓄積の非累層性	49
(二) 文献の体例の特殊性	49
1. 『鍼灸甲乙経』 2. 『千金要方』 孔穴主対法 3. 『鍼灸資生経』 4. 『西方子明堂灸経』	
(三) 同名異穴現象	53
(四) 脈・穴の同名現象	54
(五) 文献の混同による錯乱	54
1. 甲穴を乙穴に誤る 2. 1日の灸量と総灸量の混同 3. 腧穴主治と鍼灸方の混同	
二. 時代的特徴	57
(一) 漢代および漢代以前の鍼灸文献	57
(二) 三国から唐代までの鍼灸文献	58

(三) 宋代の鍼灸文献	64
(四) 金・元代の鍼灸文献	65
(五) 明代の鍼灸文献	65
(六) 清代の鍼灸文献	66
第五篇 鍼灸史学の研究方法と研究モデル	69
一. 研究方法	69
(一) 全体的な研究法	73
(二) 義例の追究と史料構成の分析	75
(三) 実験の方法	77
(四) 文献計量学の方法	80
(五) 比較研究法	81
1. 中国医学とその他の民族医学の比較研究 2. 人体医学と獣医学の比較研究 3. 医学文献と 史学文献の比較研究	
二. 研究モデル	85
第六篇 鍼灸理論の基本的特徴と変遷形式	89
一. 基本的特徴	89
(一) 構造的特徴	89
(二) 本質的特徴	93
(三) 形式的特徴	95
二. 変遷形式	96
(一) 同化現象	96
(二) 分化現象	96
(三) 一般化現象	97
(四) リンク現象	97
三. 鍼灸学術の変遷の方向と過程に影響を与えた要素	98
1. 人文的要素 2. 人為的要素 3. その他の要素	
第七篇 困惑・思索・開拓	103
一. 史学とは何か	103
(一) 歴史認識の客観性	105
(二) 部分と全体	108
1. 特定の史料を特定の歴史背景の中で考察する 2. 史実に対する完全で正確な認識は全体的 方法に依拠する 3. 史源学研究は全体的方法を運用する手本である	
(三) 史料と史学	113
1. 史料学と史源学 2. 史料, 史実と歴史に関する見識	
(四) 歴史情報のデジタル化と史学研究の現代化	124
(五) 中医史学の研究と中医史著作の編纂	126
1. 内在史と外在史 2. 専門史・断代史と通史 3. 中国医学史家と中国医学史書	
二. 中国医学の文献研究, 史学研究, 理論研究	132
付 篇	137
付一. 中国医学古典籍の版本鑑定でよく見られる問題の例説	137
(一) 序文に依拠して刊刻年代を誤った例	137
1. 前序だけを見て後序を見ずに刊刻年代を誤った例 2. 作者の自序の記年を誤って刻書の年代とし	

た例 3. 甲書の序を誤って乙書の刊刻年代とした例 4. 後人が序文を偽造・改竄したため版本の鑑定を誤った例	
(二) 牌記に依拠して刊刻年代を誤った例	149
1. 牌記の意味を誤解して版本鑑定を誤った例 2. 原刻本の牌記を翻刻本の年代と誤って鑑定した例 3. 1書の牌記を叢書の刊刻年代と誤って鑑定した例 4. 書房の牌記を盲信してはいけない例	
(三) 重修本・遞修本を原刊本と誤った例	154
(四) 重刻本を原刊本と誤った例	157
(五) 欠本を揃本と誤った例	158
(六) 総序がないために叢書に収録された書の鑑定を誤った例	159
(七) 坊刻本が名前を仮託した例	159
(八) 影印本の鑑定	161
(九) 版本の起源と沿革の考察例	163
付二. 本書が採用する文献の紹介	165
(一) 出土文献	166
1. 『足臂十一脈』 2. 『陰陽十一脈』 甲本・乙本と『脈書』	
(二) 伝世文献	167
1. 『素問』『靈樞』 2. 『黄帝内経太素』 3. 『八十一難経』 4. 『史記』扁鵲倉公列伝 5. 『脈経』 6. 『千金要方』『千金翼方』 7. 『医学綱目』 8. 王好古『医家大法』 9. 『華佗玄門脈訣内照図』	
(三) 日本の文献	186
1. 幻雲注『史記』 2. 『頓医抄』『万安方』 3. 『医心方』	

第二部 経絡

概 説	193
第一篇 「経脈」概念の形成と経絡学説の成立	197
一. 「標本」脈法と「経脈」概念の形成	198
(一) 十二「標本」の部位	199
(二) 十二「標本」の意義	201
(三) 「標本」脈法の誕生	206
(四) 「標本」脈法の変遷	213
(五) 「経脈」概念の形成	215
二. 十二の「経脈穴」と十二経	223
(一) 十二の「経脈穴」と十二経脈口	224
(二) 帛書灸方の「経脈穴」	231
(三) 『内経』の「経脈穴」	233
(四) 「経脈穴」と「原穴」	235
(五) 「経脈穴」と「絡穴」	236
(六) 「経脈穴」命名考	237
(七) 古代「経脈穴」鍼灸方の選解	239
1. 『史記』倉公伝 2. 『内経』の鍼灸方 3. 『明堂経』の鍼灸方 4. 張仲景の鍼灸方	
5. 敦煌卷子の灸方 6. 龍門石刻藥方 7. 『千金要方』の鍼灸方 8. 『千金翼方』の鍼灸方	
三. 脈口病症と経脈病症	251
(一) 「是動」病の来歴	252

(二) 脈厥と「是動」病	257
(三) 脈絶と「是動」病	259
(四) 脈解篇の病症と「是動」病	260
(五) 熱論篇の六経病症と「是動」病	261
四. 経脈の形態・機能と脈診の認識	262
(一) 脈動についての認識	262
1. 馬王堆経脈文献の「脈」についての認識	
2. 『内経』経脈循行の専門用語「出」字考	
(二) 経脈の機能	273
(三) 経脈の形態	275
(四) 『内経』の経脈の別称例	280
1. 脈・経・経隧の互用例	
2. 経脈と血脈の互称例	
3. 経脈・経絡と脈・血脈の互用例	
4. 盛経・大経・脈の互用例	
(五) 経脈・絡脈の実質に対する古人の認識	282
1. 楊上善の観点	
2. 王冰の観点	
3. 王宏翰の観点	
4. 王清任の観点	
第二篇 経絡学説の変遷	289
一. 経絡概念の形成と変遷	289
(一) 経と絡の一般概念	289
1. 動静〔拍動の有無〕で分ける	
2. 深浅で分ける	
3. 直行と横行で分ける	
(二) 経と絡の特殊な内容	292
1. 体表脈の大なるものを経とし、小なるものを絡とする	
2. 内行線を絡とし、外行線を経とする	
3. 繆刺論篇の諸絡	
4. 蹻脈の絡	
(三) 経と絡の分類	299
二. 経脈の数の変遷	300
(一) 十一脈	300
(二) 十二経脈	302
三. 経脈命名源流考	302
(一) 三陰三陽の命名解	303
1. 陽明の解	
2. 厥陰の解	
3. 手心主, 手厥陰の解	
(二) 『陰陽十一脈』脈名考	314
(三) 『足臂十一脈』脈名考	315
(四) その他の命名法	316
四. 経脈循環と営衛気行	319
(一) 営衛と血気	319
(二) 営衛の循環と経脈の連環	322
五. 経脈循行の変遷	327
(一) 起点・終点の変化	327
(二) 分支の出現とその異なる意味	329
(三) 経絡循行の特殊な変化	332
1. 足三陰経の腰仙部をめぐる分支	
2. 手足の陽明経の顔面部での左右交叉	
3. 足太陰経・足厥陰経の終点	
4. 足少陰経と衝脈	
5. 体幹部における足三陰経の循行分布	
6. 背部と脳部における足太陽経の循行	
7. 足厥陰経の循行の変遷	
8. 手太陽経と手少陽経	
9. 陽経の内行線の出現	

(四) 出どころを異にする経絡学説の経脈循行路線と方向	340
六. 経脈の分布法則と循行方向	345
(一) 経脈分布の法則	345
1. 経脈分布法則の実際的な意義 2. 経脈分布法則の形成	
(二) 経脈の循行方向	354
1. 上下が交替する循環 2. 下から上 3. 上から下 4. その他のモデル	
七. 宋以前経脈図考	356
(一) 『産経』十脈図	356
(二) 王惟一「三人経絡図」	360
(三) 楊介「存真環中図」	363
1. 成書年代 2. 『存真環中図』の構成 3. 『存真図』(臟腑図)考 4. 『環中図』(十二経脈図)考	
5. 『環中図』絵図のよりどころ 6. 『環中図』の学術的な特徴 7. 『存真環中図』佚文考	
(四) 朱肱『経絡図』『内外二景図』	384
八. 経脈病症の変遷	397
(一) 所生病の誕生	398
(二) 是動病と所生病の結合	400
(三) 経脈病症の変遷	402
1. 『靈枢』経脈篇の病症の形成 2. 経脈病症の治則の変遷	
(四) 至真要大論篇の病症	410
九. 経脈循行と経脈病症	420
(一) 経脈病症が経脈循行に与えた影響	420
1. 経脈の起点に対する影響 2. 手少陰経の循行に対する影響 3. 足厥陰経の循行に対する影響	
4. 足太陽経の循行に対する影響	
(二) 鍼灸腧穴証治が経脈循行に与えた影響	422
(三) 経脈循行が経脈病症に与えた影響	424
(四) 経脈循行と経脈病症の変遷の時間差	425
十. 経脈と臟腑の結び付きの構築と変遷	427
(一) 陰経と五神臟	428
1. 出土医書における脈と臟腑の結び付きの原型 2. 「倉公伝」に反映される経脈と臟腑の結び付きの法則	
3. 経脈篇以外の『内経』中の「経脈—臟腑相關」学説	
(二) 陽経と六腑	441
(三) 経脈と内臓の表裏関係の構築	448
(四) 経脈・絡脈・経別と臟腑の結び付きの相違	450
(五) 経脈と臟腑の結び付きの形式	451
1. 『内経』における五臟病治療の取穴法則 2. 『内経』における六腑病治療の取穴法則	
(六) 古代の「経脈—臟腑相關」文献に関するいくつかの説明	459
1. 経脈と臟腑の結び付きは、主に経脈と五臟の結び付きが突出している 2. 経脈と内臓の特異的結び付きは相対的である	
3. 経絡学説の五官—五臟の結び付きは蔵象学説と異なる 4. 臟腑の俞募穴理論は、腧穴の特異性に対する古人の補足である	
十一. 経絡学説と蔵象学説	464
(一) 「臟腑」概念の相違	464
(二) 五竅との関係の相違	466

(三) 病症の異同	468
(四) 三陰三陽属性の異同	469
十二. 経別・絡脈・皮部・経筋と経脈との関係	471
(一) 絡脈学説	471
1. 十五絡脈 2. 足太陽の別絡 3. 足少陰の絡 4. 十二皮部 5. その他の絡脈学説	
(二) 経別学説	485
(三) 経筋学説	487
十三. 奇経八脈考	496
(一) 衝脈	497
1. 脈名解 2. 衝脈の実質に対する認識 3. 衝脈の循行 4. 衝脈の病症	
(二) 任脈	506
1. 脈名解 2. 任脈の循行 3. 任脈の病症	
(三) 督脈	509
1. 脈名解 2. 督脈の循行 3. 督脈の病症	
(四) 蹻脈	512
1. 脈名解 2. 蹻脈の循行 3. 「陰蹻」穴と「陽蹻」穴 4. 蹻脈の病症	
(五) 帶脈	516
(六) 維脈	516
第三篇 経絡専篇の研究	518
一. 『内経』の経絡専篇の研究	518
(一) 『靈枢』経脈篇	518
1. 編者と成立時期 2. 基本の構成と内容	
(二) 『靈枢』経別篇	531
(三) 『素問』皮部論篇	533
(四) 『素問』脈解篇	536
二. 『十一脈』および『靈枢』経脈篇・経筋篇の通釈	546
(一) 『足臂十一脈』と『陰陽十一脈』の経脈循行術語の解説	547
(二) 十二経脈文献の通釈	550
1. 足太陽脈 2. 手太陽脈 3. 足少陽脈 4. 手少陽脈 5. 足陽明脈 6. 手陽明脈	
7. 足太陰脈 8. 手太陰脈 9. 足厥陰脈 10. 足少陰脈 11. 手少陰脈, 手心主脈	
付一〜付四	600
第四篇 経絡と腧穴	624
一. 十五絡穴と十五絡脈	624
二. 経脈と経穴	631
(一) 経脈循行の腧穴帰経に対する影響	634
1. 会陽穴 2. 蹻脈穴 3. 背部第2側線上の腧穴の帰経	
(二) 腧穴帰経の経脈循行に対する影響	636
1. 足三陰経の循行に対する影響 2. 衝脈の循行に対する影響 3. 任脈の循行に対する影響	
4. 陰維脈・陽維脈の循行に対する影響	
第五篇 現代の経絡研究に関する若干の考察	640
一. 現行の経絡研究の思考方式を形成した背景の分析	640
(一) 経脈―臓腑の相関研究	640

1. 正確な研究思考方式が必要である	2. 堅実な実践的基礎が必要である	3. 厳格な実験のデザインが必要である	(1) 「決定実験」(crucial experiments) のデザイン	(2) 実験と論理的推理を組み合わせる
(二) 「循經感伝」現象の研究	650			
(三) 経絡の客観的検査測定	659			
二. 経絡学説の理論構造と科学的内容	660			
1. 体表の遠位上下間の結び付きの法則	2. 体表と内臓の内外の結び付きの法則	3. 『内経』のその他の結び付きの法則	(1) 体表—内臓の内外の結び付きの法則	(2) 体表—体表の上下の結び付きの法則
(3) 上下・内外の結び付きの法則	(4) 体表—体表の左右の結び付きの法則			
三. 経絡研究が実験室に入る前の五つのプロセス	668			
(一) 濾過——二つの構成要素を鑑別・分離する	669			
(二) 解釈——第1要素を理解・翻訳する	670			
(三) 表現——一つあるいは1組の科学的命題を提出する	670			
(四) 評価——命題の価値を判断する	671			
(五) 検証——命題の真偽を考察する	672			
四. 経絡問題に対する実験研究の全体的思考方式	677			
(一) 遠位の体表—体表間の結び付きと調節	680			
(二) 遠位の体表—内臓間の結び付きと調節	681			
付 篇	683			
付一. 『内経』中の起源の異なる経絡学説の発掘	683			
(一) 『素問』熱論篇	683			
(二) 『素問』蔵気法時論篇	685			
(三) 『靈樞』経筋篇	687			
(四) 『素問』繆刺論篇	694			
付二. 文学・歴史類の古典籍における経絡学説	699			
(一) 『史記』扁鵲倉公列伝	700			
(二) 鄭玄注『易緯通卦驗』卷下	704			
(三) 賈公彦注『周礼』	707			
(四) 『太平經』	708			
結 語	709			

第三部 腧穴

概 説	715
第一篇 腧穴概念の形成と変遷	718
第二篇 古代の取穴法の変遷	726
一. 尺量法	726
二. 縄量法, 竹量法	727
三. 骨度法	728
四. 手指同身寸法	730
第三篇 腧穴部位の変遷	732
一. 腰背部穴	732
二. 腹部穴	736

三． 前・後髪際の穴	737
四． その他の常用穴	738
(一) 犢鼻と膝眼	738
(二) 清冷淵と青靈	739
(三) 三陰交と「足太陰」	740
第四篇 腧穴主治病症の形成と変遷	743
一． 腧穴主治の形成	743
(一) 臨床実践経験の総括	743
1. 脈診病症に由来するもの	
2. 疾病の反応点に対する認識に由来するもの	
(二) 中国医学理論からの類推	749
1. 経絡学説にもとづく類推	
2. 藏象学説にもとづく類推	
3. その他の学説にもとづく類推	
二． 腧穴主治の変遷	756
(一) 『黄帝明堂経』による腧穴主治の総括	757
1. 多穴鍼灸方の主治症の処理	
2. 主治症の鑑別を誤った例	
3. 腧穴の判別を誤った例	
4. 同名異穴の鑑別を誤った例	
5. 「経脈穴」の判別を誤った例	
(二) 唐代における腧穴主治の整理	772
1. 『千金要方』孔穴主対法	
2. 『外台秘要方』明堂	
(三) 宋代における腧穴主治の整理	775
1. 『太平聖恵方』鍼経・明堂	
2. 『銅人腧穴鍼灸図経』	
(四) 金・元代における腧穴主治の整理	779
(五) 明代における腧穴主治の整理	780
三． 鍼灸腧穴主治の錯誤例	784
(一) 穴名の字形が似ているために主治症を混同した例	784
1. 「小海」を「少海」に誤る	
2. 「大泉」を「天泉」に誤る	
3. 「夾人中」を「人中」に誤る	
(二) 同名穴の主治症を混同した例	785
1. 膝「陽関」を腰「陽関」に誤る	
2. 足の「通里」を手の「通里」に誤る	
3. 腹「通谷」を足「通谷」に誤る	
(三) 原処方を誤解して腧穴主治症を混同した例	786
1. 穴名を主治症に誤る	
2. 禁忌証を主治症に誤る	
3. 原文の誤解	
(四) 腧穴の弁別を誤って主治症を混同した例	788
1. 「陽綱」穴の主症を「魂門」穴の主症に誤る	
2. 「陰交」穴の主症を「氣海」穴の主症に誤る	
3. 横骨の主症を「横骨」穴の主症に誤る	
(五) 穴名欠落のため2穴の主治症を1穴の主治症とした例	789
1. 「前腋」の主症を「居膠」の主症と混同する	
2. 「五処」の主症を「瘕門」の主症と混同する	
第五篇 腧穴帰経の起源と沿革の考察	791
一． さまざまな帰経方法	791
二． 歴代の腧穴帰経の異同	794
(一) 頭顔面部の穴	795
(二) 肩頸項部の穴	797
(三) 胸腹部の穴	800
(四) 上肢の穴	802
(五) 下肢の穴	802

第六篇 『明堂経』に見られる漢代以前の医学思想	806
一、 経絡学説	806
(一) 経脈病症	806
(二) 絡脈病症	807
(三) 経脈と臓腑のつながり	807
(四) 経脈の循行	808
二、 蔵象学説	809
(一) 五神臓の説	809
(二) 十二原の説	809
(三) 命門学説	811
(四) 三焦学説	812
三、 溪谷学説	814
四、 脈診についての認識	815
(一) 人迎脈口診法	816
(二) 十二標本診法	816
(三) 脈動に対する認識	818
結 語	820

第四部 刺灸法

概 説	825
一、 刺法の起源と変遷	825
(一) 迎隨の補瀉	825
(二) 徐疾の補瀉	827
(三) 宋代以後における刺鍼補瀉法の変遷	830
二、 灸法の起源と変遷	835
(一) 艾条灸	835
(二) 隔物灸	836
(三) 焮法	836
(四) 神鍼火、桑柴火、桃枝火	836
(五) 石葉火灸	837
三、 鍼と灸の関係	838
(一) 鍼または灸を単独で行う例	840
(二) 鍼と灸を併用する例	841
第一篇 鍼具と鍼法	843
一、 九鍼の形状と適応証	843
二、 九鍼の臨床運用	847
(一) 鑱鍼	847
(二) 員鍼	848
(三) 鍤鍼	848
(四) 鋒鍼	848
(五) 鉞鍼	849
(六) 員利鍼	849

(七) 毫鍼	850
(八) 長鍼	851
(九) 大鍼	852
付録：古今の鍼具	853
第二篇 寒熱刺法の形成と変遷	857
第三篇 特殊灸穴法考	862
一. 騎竹馬灸法	862
二. 「四花」灸法	867
付録図1：『聖濟総録』の「四花穴」図	874
付録図2：『巖氏濟生方』の「四花穴」図	876
付録図3：『万安方』の「四花穴」図	879
付録図4：『十葉神書』の「四花穴」図	882
三. 横三間寸灸法	885
結 語	888

第五部 治療

概 説	893
第一篇 古代の診脈法	895
一. 特殊な診脈法	895
二. 三部九候診脈法	896
(一) 診脈部位と診法	896
(二) 三部九候診法の運用例	898
三. 十二経標本脈診法	899
(一) 診脈部位と診法	899
(二) 標本脈診法の運用例	902
四. 足大指の間の脈診法	903
五. 耳後の間の絡脈診法	904
六. 癰疽脈診法	905
七. 手の肝脈診法	905
八. 少数民族医学の診法	906
(一) トウチャ医学の診脈法	906
(二) チワン医学の診脈法	909
(三) チベット医学の診脈法	909
九. 脈法と鍼法	910
(一) 凡そ将に鍼を用いんとすれば、必ず先ず脈を診る	910
(二) 脈象—鍼灸の治療効果を判定する客観的指標	911
第二篇 鍼灸の治療原則の形成と変遷	913
一. 盛なれば則ちこれを写し、虚なれば則ちこれを補い、盛ならず虚ならざれば、経を以てこれを取る	914
二. 寒すれば則ちこれを留め、熱すれば則ちこれを疾くす	916
三. 陷下すれば則ちこれに灸す	917
第三篇 腧穴証治と鍼灸方	920
一. 腧穴文献と鍼灸治療文献の交錯現象	920

二．腧穴証治から鍼灸方に至る変遷過程	922
第四篇 鍼灸治療の数値化概念の形成	926
一．鍼灸の治療間隔	926
二．鍼灸の刺激量とクール	929
（一）5日を1クールとするもの	930
（二）7日を1クールとするもの	930
（三）毎日漸増させる例	931
（四）先ず増やし後に減らす例	931
第五篇 鍼灸配穴処方の原則と病症選穴の規則	933
一．配穴の原則	933
（一）近位取穴〔局所取穴〕法	933
（二）遠位取穴〔遠隔取穴〕法	934
（三）弁症取穴法	935
二．病症選穴の規則	938
第六篇 鍼灸における禁忌の変遷	944
第七篇 呪禁法が鍼灸学に与えた影響	951
一．鍼呪の法	951
二．運用例	952
第八篇 古代鍼灸方の選解	959
一．『五十二病方』灸方の解説	959
二．『内経』鍼灸方の選解	962
（一）標本脈に刺激する鍼灸方	962
（二）その他の鍼灸方	963
三．『明堂経』鍼灸方の選解	966
結 語	970
1．鍼と灸の作用に違いがあるか 2．鍼灸治療の数値化法則をさらに研究する 3．鍼灸の治療効果を簡便で実用的に判定するための客観的指標を探索する 4．鍼灸の治療作用の限界	
後記	973
監訳者あとがき	979
図版タイトル一覧	981
翻訳者注	983
引用古典文（原文）	1017
翻訳者注、引用古典文（原文）注で使用した参考文献	1211
索引〈人名、書名、キーワード、『素問』・『靈枢』書名および篇名、経穴〉	1214